



TITLE:

<実践報告>美術館における教育活動の一考察 : Halsey Institute of Contemporary Art の取り組み

AUTHOR(S):

渡川, 智子

---

CITATION:

渡川, 智子. <実践報告>美術館における教育活動の一考察 : Halsey Institute of Contemporary Art の取り組み. 京都大学生涯教育フィールド研究 2015, 3: 91-98

ISSUE DATE:

2015-03-06

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/196180>

RIGHT:

【実践報告】

美術館における教育活動の一考察  
-Halsey Institute of Contemporary Art の取り組み-

渡川 智子

A Study of Educational Programs in Art Museums  
on the Educational Program in the Halsey Institute of Contemporary Art

WATARIKAWA, Tomoko

## 1. はじめに

筆者は2014年5月から7月にかけて約3ヶ月間、アメリカ・チャールストンにある美術館、Halsey Institute of Contemporary Art（以下HICA）にてインターンを行う機会を得た<sup>1</sup>。HICAでは展覧会や市民を巻き込んだ企画・イベントを実施するほか、「Looking to See」という名前の教育プログラムを実施しており、筆者はインターン期間中主だつてこの活動に携わっていた。本稿では、HICAでの教育プログラムの実践報告と、その活動を通して生じる参加者への学習効果について考えていきたい。

## 2. Halsey Institute of Contemporary Art の特徴

HICA (Halsey Institute of Contemporary of Art) は、「世界中の革新的なビジュアルアーティストによつてもたらされたアイデアを生産、展示、解釈、普及するための学際的な実験所を提供する<sup>2</sup>」こと、「コレクションを持たない美術館として、革新的なアーティストと多様なコミュニティの間に意味ある相互作用を創造する<sup>3</sup>」ことを目的とし、チャールストンの中心部に設置された、現代美術を専門とした小規模な美術館である。美術館はCollege of Charlestonの敷地内に位置しており、入口が街の大通りに面しているため、市民や観光客が比較的訪れやすい立地である<sup>4</sup>。

HICAでは年に6~7回の企画展を開催している。筆者のインターン期間中には、「The Insistent Image: Recurrent Motifs in the Art of Shepard Fairey and Jasper Johns」（2014年5月22日~7月12日）という展覧会が開催された。この展覧会は、アメリカ現代美術の巨匠Jasper Johns(ジャスパー・ジョーンズ)<sup>5</sup>とグラフィティアーティスト<sup>6</sup>のShepard Fairey(シェパード・フェアリー)<sup>7</sup>の作品から構成された。また当展覧会に併せ、Shepard Faireyがチャールストン市内の5箇所に壁面作品を制作する企画が実施されたことにより、当展の展示は、美術館内部だけでなく、街全体が会場となっていた。さらに会

期中は、アーティストと美術館のディレクターとの対談、アーティストによるギャラリーツアー、メンバーシップに向けたツアーなど、様々なイベントが行われた。

HICA では、このような展覧会の実施や本稿で取り上げる教育活動の他に、ライブ、アーティスト・イン・レジデンスなど、年間を通して様々な活動を実施している。

### 3. 教育プログラム 「Looking to See」

HICA が実施する教育プログラムの核となるのが「Looking to See」である。鑑賞者が美術作品と意識的に関わることをねらいとしたこのプログラムは、ガイドボランティアによる鑑賞ツアー、鑑賞ツールなど、複数の活動で構成されている。主な対象はチャールストンエリアの K-12 (幼稚園～高校) の生徒である。以下、鑑賞ツアー、鑑賞ツールの 2 つの活動を取り上げて、その内容をみていく。

#### 3-1: 鑑賞ツアー 「Looking to See tour」

##### ① ツアーの概要

鑑賞ツアーはエデュケイターおよびガイドボランティア<sup>8</sup>の誘導によって行われる<sup>9</sup>。ツアーの流れとしては、最初にエデュケイターから美術館と展覧会の概要について簡単な解説が行われ、その後ガイドボランティアと一緒に作品をみてまわる。ツアーの内容は、この基本的な流れ以外に定式が設定されておらず、誘導役のガイドボランティア個人個人に一任されている。そのため、ガイドの方によっては、事前に展示作品に関連する別の作品や書かれたモチーフの写真などを多数用意し、それらを随時子供たちにみせながら作品と一緒に鑑賞する方法や、ギャラリー内に輪になって座り、まずは子供たちの疑問を参加者全員で有することから始める方法をとるなど、様々なツアーの形がある（【写真 1】参照）。各々のスタイルは様々であるが、ツアー実施に際しては、ガイドの一方的な解説ではなく対話を重視すること、開かれた問い（「どこからそう思ったの？」等、人によって応答内容が異なり、一つの答を導かない問い。）を多く投げかけること、という共通事項が設けられていた。毎回子供たちから発せられる様々な問いと発見にガイドの方たちも多めに刺激を受けながら、作品、鑑賞者、ガイドボランティアの三者によって創造的な解釈と対話が生み出されていた。偶然居合わせた一般の来館者が、子供たちの盛り上がりをやさしく見守る様子も多くみられた。

##### ② 工作活動

週に 1 度、鑑賞ツアーの後に、展示されている作品を基にした簡単な工作活動を実施している。筆者のインターン期間中に開催されていた展覧会の出品作家 2 人は、それぞれの画業において同一のモチーフを反復しているという特徴があり、本展の出品作品もこの特徴を軸に選出、展示されている。この活動では、こうした Shepard Fairey と Jasper Johns の作品群に登場する様々なモチーフ（アメリカ国旗、太陽、天秤、\$マークなど）を自由にコラージュして、子どもたちが自分だけのオリジナル作品を作り出した。毎回 30 分程度の活動であったが、子どもたちは真剣に各々の世界を作り上げていた。（【写真 2】参照）

### ③ ツアーに対する評価

各ツアーの後にはガイドボランティアおよびグループ代表の方が、ツアーを振り返るための評価シートの記述を実施している<sup>10</sup>。ツアーの後に評価を実施することによって、ガイドボランティアとグループ代表の方がツアー進行と生徒の経験を意識的に省察することでき、参加者の学びの意識化、活動の更なる改善などに繋がると考えられる。

### 3-2:鑑賞ツール

「Looking to See」における活動として、鑑賞ボランティアによるツアーの他に、鑑賞用ツールも用いられていた。このツールは、美術館に来館するグループに向けても実施しているが、筆者のインターン期間中は主に美術館外の出張プログラムにおいて活発に使用した。インターン期間（5～7月）がアメリカでの夏休み期間に重なっていたため、近隣の学校などを舞台に、NPO 団体や学校が主催する様々なサマープログラムが実施されていた。HICA もいくつかのプログラムに参加し、多様な参加者を対象に「作品鑑賞」に特化した活動を展開した。以下、作品鑑賞の際に用いられた3つの鑑賞ツールを紹介していく<sup>11</sup>。

#### ① スピーチバブル・シンキングバブル

この活動は、漫画の吹き出しから着想された鑑賞ツールである（【写真3】参照）。2種類の吹き出し（スピーチバブル【図1】・シンキングバブル【図2】）を用いて、絵画・写真・彫刻作品などの中に登場する人物、あるいは物に吹き出しをかざしていく。鑑賞者は、作品の状況（どんな場面か、何をしているのかなど）をよく観察し、何を話しているのか、考えているかを自分なりに想像していく。発言に対しては、画中のどこからそう思ったのか、理由も聞いていく。

#### ② ディアマンテ・ポエム

この活動は、ディアマンテ・ポエムというルールに沿ったポエム作りである。作品を鑑賞し、作品について感じたこと、考えたことを詩で表していく。ディアマンテ・ポエム<sup>12</sup>は4行の詩で、1行目に「思いついた1単語」、2行目に「動詞を含んだ1文」、3行目に「比喩を用いた1文」、4行目に「思いついた1単語」という形式からなる。毎回、約10人～15人の子供たちと一緒に作品をみながら、この形式に沿って即興で詩を作っていく（【図3】参照）。なお、ポエム作りの活動に関して言えば、ディアマンテ・ポエムの他にも、作品をみて早口言葉や俳句を作るという活動も行った。いずれの形式にしても、ポエム作りからは、作品から感じる印象を言葉にすること、さらにその言葉を吟味するという経験を得ることができる。

#### ③ 五感を想像する

この活動で使用される鑑賞ツールは、それぞれ質問が書かれた5枚のカードであり、鑑賞者には、ランダムに引かれたカードの問いに答える形で発言してもらう。主に風景が描かれた作品を見る際に、用いられた。5枚のカードには、「When I visit this place, I can see…（この場所に訪れたら、…がみえる）」「When I visit this place, I here…（…が聞こえる）」「When I visit this place, I can feel…（…を感じる）」「When I visit this

place, I taste… (…の味がする)」「When I visit this place, I smell… (…のにおいがする)」といった、五感にまつわる問いが書かれており、目を使って、作品に描かれてあるものを観察すると共に五感への想像を働かせていくことを促していく。鑑賞者の発言に対しては、なぜそう思ったのか理由も聞いていく。

この他、HICA で実施されている鑑賞ツールは様々ある。HICA で用いられている鑑賞ツールをまとめたワークシートは、公式ウェブサイト上からダウンロードすることが可能である<sup>13</sup>。

#### 4. 考察：作品を「みる」こと

HICA での教育プログラムの特徴は、作品を意識的に「みる」ことを鑑賞者に促す点にある。上記でみてきた教育活動（鑑賞ツアー、鑑賞ツール）は、それぞれ「作品との対話」「作品への没入」「作品全体を捉える」という、作品との3つの関わり方を促しているように思う。以下、この3つの観点からHICA での教育活動を考察していきたい。

##### ①「作品との対話」：鑑賞ツアー

鑑賞ツアーにおいて重要とされていたのは「対話」である。対話を介しながらグループで鑑賞していく手法の源流は、アメリカ・ニューヨーク近代美術館において開発された Visual Thinking Strategies<sup>14</sup>である。HICA での鑑賞ツアーもこの手法を前提としており、ガイドボランティアが鑑賞者に対して開かれた問いを投げかけること、どこからそう思ったのか、解釈の理由を問うことが随時行われていた。

どこからそう思ったのかを問いかけることは、鑑賞者に作品をみなおして、自分の発言の根拠を探すことを求めている。これにより、観察に基づいた論理の展開ができるようになるだろう。また対話を介して作品と向き合うことを通して、唯一の正しい答えを教わるのではなく、自分なりの解釈を導き出すことが可能となる。さらに自分とは違う意見を持った他者と対話をしながら作品を鑑賞していくことは、一つの作品に対して様々な捉え方が存在することを知り、ちがう見方を探そうとする思考パターンが身に付くこと、自分の考えを論理的にふりかえる習慣が身につくなど、作品への関わり方を意識的に見直すことができるようになる。

加えてこの鑑賞ツアーでは、対話を通じた鑑賞を原則にしつつも、ガイドボランティアの方々から、作品にまつわる様々な情報(アーティストの経歴情報、作品に用いられたモチーフの典拠、関連した作品画像や写真など)が参加者に提示されていた。鑑賞者の直感や考えとの関連性が見出された段階で、作品鑑賞からは得られない知識を提供することにより、対象への関心や思考が更に深まっていくと考えられる。対話において情報、知識を提示することは、美術史的な正しい見方を促すのではなく、解釈の多様化を推し進めることに繋がるだろう。

##### ②「作品への没入」：スピーチ・バブル、シンキング・バブル／五感を想像する

吹き出し(スピーチバブル・シンキングバブル)を用いて、登場人物(あるいは物)が

考えていることを想像していく際、鑑賞者は作品のなかに描かれているものに成りきって、あるいは成りきるために、登場人物が身を置く状況や背景に目を向けることになる。そのとき、鑑賞者の意識の中で自己が関係している客体は、作品全体というよりも、作品の中に描かれている諸要素である。言い換えれば、作品をみている私が、作品の中の出来事に登場することになる。それはつまり、鑑賞者と作品との間の距離がほとんどなくなり、鑑賞者が作品の中に「没入」している状態であると捉えることができるだろう。

このことは、五感を働かせて想像していく活動にも共通する。ある作品を前にして、「When I visit this place, I smell…」という言葉を投げかけられた際、鑑賞者は「作品に何が描かれているのか」を客観的に観察して認識しようとするのではなく、その風景に自らを移入させて、作品のなかの“匂い”を感じる手がかりを得るために、描かれているものを認識しようとする。この活動においても、作品とそれを見ている自分の間にある距離はほとんど無くなり、鑑賞者は作品へ没入する体験を得ている。

この活動を通して、たとえ作者が誰か分からなくても、何が描かれてあるのかが読み取れなくても、自らが感じた印象、解釈を手がかりにしながら、想像を膨らましていくことが可能になる。

### ③「作品全体を捉える」：ディアマンテ・ポエム

前述の「作品への没入」が、作品に描かれた人々（あるいは物）という作品内の一部分への同一化を促す試みだとしたならば、4行のポエム作りは、その対極にある「作品の全体像を捉える」ことを促していると考えられる。まず1行目において、作品をみて「思いついた1単語」を表現する際、鑑賞者は直感的に作品全体と関わることを強いられる。その後、2行目・3行目における「動詞を含んだ1文」、「比喩を用いた1文」の表現では、作品内の要素を意識することを通して作品の全体像を捉える。4行目の「思いついた1単語」の表現では、前3行での解釈を含み込み、改めて作品の全体像を捉え直していく。

この活動を通して鑑賞者は、作品への自らの解釈を論理的に捉え直し、表現する経験を得ることができる。また、ある形式に沿って表現することによって、新たな発想プロセスを得ることに繋がるかもしれない。

以上、作品を「みる」ことを異なる方法で促している活動について、3つの観点から考察した。これらの活動において共通していたのは、鑑賞者の体験を重視し、鑑賞者の能動を必要としていることである。さらに、「作品への没入」を促す活動において、鑑賞者の発言に対して、どこからそう思ったのか解釈の理由を問うたり、「作品への没入」と「作品全体を捉える」活動を連続して行ったりしていた。このように様々な角度から美術作品に関わること、関わり方のバリエーションをいくつも提示することによって、鑑賞者の関心を引き出すと共に、一つの答えを求めるのではなく、自分自身で可能性を追求・吟味する習慣を促すことができると考える。

## 5. おわりに

HICAで行われていた「Looking to see」プログラムは、様々なアプローチを用いること

により、鑑賞者と作品の活発な関わりを生み出す活動であった。本稿では特に、作品を「みる」ことをどのように促しているのかという点に着目し、その特徴として「作品との対話」「作品への没入」「作品全体を捉える」という3つの観点を提示した。本稿で提示したこの3つの観点は、教育活動の実践、鑑賞者の経験を検証していくうえで、重要な足がかりになると考える。今後、これら3つの枠組みを用いながら、美術館での教育活動が鑑賞者の思考力や経験にどのように作用するのかについて、実証的に考察を続けていきたい。

## 謝辞

インターンをさせていただいた、Halsey Institute of Contemporary Art・ディレクターのMark Sloan氏、エデュケイターのLizz Biswell氏およびスタッフの皆様には大変お世話になりました。この場を借りて深く感謝申し上げます。

## 写真・図



【写真1】鑑賞ツアーの様子



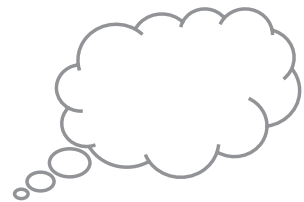
【写真2】工作活動の様子



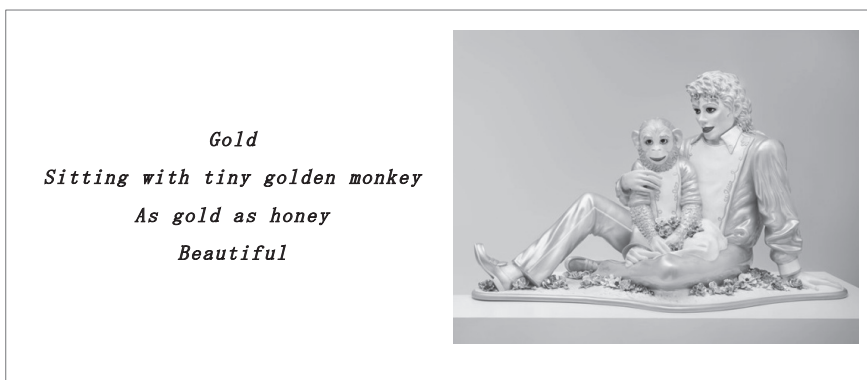
【写真3】吹き出しツールを用いた鑑賞の様子



【図1】スピーチバブル



【図2】シンキングバブル



【図 3】左のポエムは、右の作品（ジェフ・クーンズ “Michael Jackson and Bubbles” 1998）の鑑賞を基に作成された。

<sup>1</sup> HICA では毎年夏に数か月、インターナショナルインターン生を 1 名採用している。筆者もインターナショナルインターンとして、3 か月間勤務した。

<sup>2</sup> Halsey Institute of Contemporary Art 公式ウェブサイト <http://halsey.cofc.edu/about/> 「MISSION」より引用、筆者訳。（最終アクセス：2015 年 2 月 1 日）

<sup>3</sup> 同上。

College of Charleston には芸術学部があり、毎年春には芸術学部の学生の作品を展示する “Young Contemporaries” という展覧会を開催している。さらにアートマネジメントや美術史を専攻している学生を積極的にインターン生<sup>4</sup>として採用するなど、学生の実践の場として美術館が有効に活用されている。

<sup>5</sup> ジャスパー・ジョーンズ（1930-）はアメリカの画家。ジョージア州オーガスタに生まれ、サウスカロライナ州の田舎町で育ち、同州立大学で美術を学ぶ。

<sup>6</sup> グラフィティとは、スプレーやフェルトペンなどを使い、壁などに描かれた落書きのことである。グラフィティが芸術として公に認知されるようになったのは 70-80 年代ニューヨークにおいてである。

<sup>7</sup> シェパード・フェアリー（1970-）はロサンゼルスを中心に活躍するアーティスト／デザイナー。チャールストンの出身。

<sup>8</sup> ガイドボランティアは登録制で、仕事を退職された方が多く参加していた。その多くは学校で美術を教えていた経験を持っている方々だった。各展覧会ごとに、ディレクターや展覧会担当者からの展示レクチャーを受けたのち、各々が展示作品について多角的に探究していく。随時エデュケーターがアドバイスをを行っていたが、基本的には各々が自主的に作品調査を行っていた。

<sup>9</sup> このツアーは学校団体などのグループが対象で、事前申し込みが必要である。申し込みの際に、グループ代表者と日時、時間、内容等の簡単な打ち合わせが行われる。平均すると週に 3 回ほどのツアーが実施されていた。

<sup>10</sup> 例えば、ツアーを誘導したガイドボランティアへは、「ツアーの内容は参加者にとって適当だったと思いますか?」「参加者のアートに対する気づきや興味は向上したと思いますか?」



「参加者は自分の意見や経験、知覚したものを具体化できましたか？」といった、ツアーの進行への振り返りと、参加者の態度や反応への振り返りを促す項目から構成されている。一方グループを引率したリーダーへは、「展示と鑑賞ツアーは、生徒の能力や関心、および学校のカリキュラムと関連がありましたか？」「展示と鑑賞ツアーは、生徒の批判的思考力を促しましたか？」といった、ツアーの進行への気づきと生徒の変化を振り返る項目から構成されていた。<sup>11</sup> なお、本稿で取り上げた活動以外にも、HICA では多数の教育プログラムが存在する。インターン期間中に筆者が最も頻繁に参加した活動であるという理由から、本稿では、鑑賞ツアーと3つの鑑賞ツール活動を取り上げた。

<sup>12</sup> デイアマンテはスペイン語でダイヤモンドの意味。出来上がった4行の詩はダイヤモンドの形になる。

<sup>13</sup> 公式ウェブサイト (<http://halsey.cofc.edu/>)、「LEARN」カテゴリ内。(最終アクセス：2015年2月1日)。

<sup>14</sup> Visual Thinking Strategies(以下、VTS)は、認知心理学者のアビゲル・ハウゼンとニューヨーク近代美術館の教育部長のフィリップ・ヤノウインが1980年代から研究と調査を始めて確立した美術鑑賞教育の方法のことである。VTSでは対話を通してグループで作品を鑑賞していく。その際、教師は正解を与える役割ではなくファシリテーターとして参加し、「①この作品の中で、どんな出来事が起きているのでしょうか？」「②作品のどこからそう思いましたか？」「③もっと発見はありますか？」という3つの基本質問を鑑賞者に投げかけながら、鑑賞者から出された意見の共通点や相違点を示すなど、議論の交通整理を行う。これまで10年以上に及ぶフィールド調査の結果、対話型鑑賞が美的思考力だけでなく、その他の認知能力、特に観察力や推察力、そして根拠に基づいた論証能力を、比較的短期間に向上させることを明らかとなっている。VTSの実践方法や学習効果、他の教科への応用については、フィリップ・ヤノウイン著、京都造形芸術大学 アート・コミュニケーション研究センター訳『どこからそう思う？ 学力をのばす美術鑑賞 ヴィジュアル・シンキング・ストラテジーズ』(淡交社、2014)に詳しい。